

ロシア義理姉人妻と
その娘を孕ませろ！



母娘催眠調教
寝取られロシア妻

基本CG24枚
本編117P総ページ数269P

登場人物

(名字は全員同じ「小坂」)



凜

水泳部所属
幼なじみの祐二とは
彼氏彼女の関係
おじさんのことは
「ゴリラぽいし目つきがキモい」
と思っている



ユーリヤ

ロシアから留学しそのまま結婚
主人公の義理の姉
主人公とは元クラスメイトで
夫と出会わせてくれた親友と思っている



兄貴

ユーリヤと結婚し
娘(凜)を授かる
真面目な性格



祐二

主人公の息子
父親とはあまり話さない
ユーリヤは初恋の人で
今でも気になる



主人公

ユーリヤを手に入れるために
催眠を研究し遂に実行に移す
兄貴とは全然似ていない

どこからか声が聞こえる

夫以外の性行為は？

「以前、満員電車に乗ったとき、痴漢に…体を…触られました…」

「見知らぬ男に体を玩ばれたということだね君は興奮した？」

私は目を閉じたまま、首を横に振る



「これは懺悔だから
言えば楽になる
もう一度聞くとよ」

「好きでも無い男に
体を玩ばれて興奮した？
君の愛しい夫よりも感じた？」

「…はい」





「服の上から胸を強く揉みしだかれて…ペニスを…私の性器に…擦りつけてきました」

「違うだろっつー」

「以前教えられたとおりには言わないと…」
「…はい、チンポを私のオマンコに擦りつけてきました」



「身をよじって抵抗していると
手がスカートの中に潜り込んできて…
手でチンポをクリトリスに
擦りつけられました
何度も…何度も…」

「その時、イツたんだね？」

「は…」



「そのまま犯された?」

「いえ…レイプはされませんでした」

「駅のトイレで、精液を拭き取ってオナニーしました…」

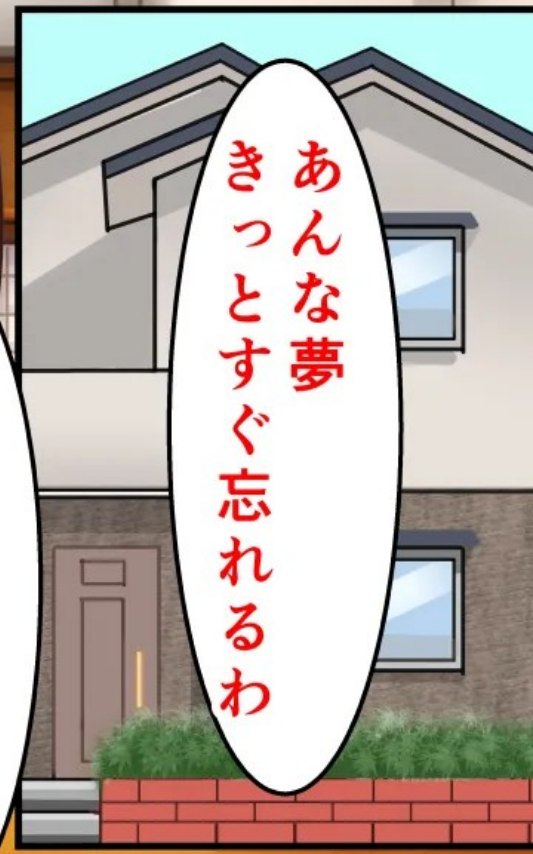
「その時のオナニーが気持ちよくて…」

「夫に後ろめたい気持ちがあります…罪悪感を…感じていました」



今日も
一日頑張って!

うん、ネクタイよし♪
ステキよあなた♪



あんな夢
きつとすぐ忘れるわ



ちゅっ♡

愛してるっ



気をつけてね

いって
らっしやい

もう、朝から
見せつけないだよ

私の娘、凜
夫との愛の結晶

もう毎朝
だよ
ね
それ

両親がいつまでも
新婚気分って

年頃の娘としては
複雑なだけだよ



私の大切な家族…
ずっと続く
私の幸せな日常



ほーんと
いつまでも
仲いいんだよね
あの二人

叔母さん美人だし
昔っから
変わらないよな

いいよなー
叔父さん羨ましい

もう
彼女の前で
母親褒めないでよ

ははっ
俺には凧が
一番だつて

私達も……さ

きゅっ♡

おいおい
朝から
恥ずかしいだろ

いいじゃん♪
見せつけ
ちゃおうっ

義姉さん、兄貴元気になってきたな

この間はありがとう
おかげであの人も表情明るくなったわ

にこ

生真面目な兄貴は
仕事で潰れる寸前までいった

俺は兄貴の会社のオーナーとは個人的に懇意にしている
仕事での便宜を図って貰ったのだ



まあ元々、過度な重圧加えるよう仕組んだのだが
そういうワケで義姉さんは俺に感謝してくれている

兄貴はこのことを知らない
コネを使ったりするのが嫌いな真面目君だからだ
二人の秘密が出来たことで、かつての親密さを取り戻した気がする

ユーリヤ、君のためならそれくらい簡単だ
…そう呼ばれるのも久しぶり
あなたはいつも私達を助けてくれる
ありがとう


ユーリヤの笑顔を見る度に
俺の中に暗い感情が溜まっていく

兄貴と結婚する前は、彼女は俺とクラスメイトだった
彼女に一目惚れした俺は
留学生でこの国に慣れない彼女のために奔走した
それを横からしゃしゃり出てきた兄貴に奪われた
彼女も兄貴も俺の気持ちを知っていたはずなのに
俺はずっと、そのことを恨んでいた
彼女と兄貴は俺を裏切ったのだと

自分の息子と彼女の娘が
仲が良いのも正直気に入らない

さて、そろそろだな





ユーリヤの表情が消える
お茶請けに持ってきた菓子に仕込んだ薬物
ここ一月で、彼女に何度も摂取させ、暗示を幾度もかけた
今では催眠状態にするのは容易い
何年も前から独自に培ってきた技術

この技術で、何人も女を墮とした
兄貴の会社のオーナーには女学生をあてがっているのだ
その経験からわかっていることがある
そろそろユーリヤの仕上げができる頃合いだと

罪悪感を快楽に結びつけるのだ

「さあ、あなたの
全てをさらけだしてくださるら」

また…あの声だ…



どうしてもこの声に
抗うことが出来ない

なぜならこの声は
自分自身への問いだから
着ているものを脱ぎ捨てていく

「夫との性行為に不満は？」



愛する夫との月に2、3度の性行為
それもすぐに終わってしまおう
もつと愛し合いたいと願っても
繋がった途端、夫は果でてしまおう

それでも若い頃は
幾度も交わることができた
でも近頃はひとたび果てれば
疲れ切って眠ってしまおう

「そんな夫を愛おしいと思う反面
物足りなさを感じて…：しまいます」

たぶんっ♡

「はい…本当は毎日でも抱いて欲しい

…ここ数年性欲が
増している気が…します」

(コレ…キモチイイ…)

「物足りないというの？
自慰をすることがある？」

「はあ…はあ…はい

夫とのセックスの後

オナニーをしてしまいます」

「夫の寝ている横で？」

「ん…そんなこと…できない

飲み物を取りに行くフリを

したりシャワーを浴びたりしながら…」

ア..

ハア..

ハア..

もみゅ

もみゅ

「夫を偽ってきたというわけですね」

「本当のあなたは痴漢されて悶える変態ですからね」



「ちがう…あんっ
だって、仕方がないこと…ダカラ…」

「本当は痴漢とセックスしたかった？」
「はあ…はあ…チガウ…」



「痴漢のチンポで
犯されることを
想像して自慰に耽った？」

「ソウ…デス…でも…
あの時のコトを…思い出して
オナニーする度に
そんな自分が嫌いにナリマスッ！」



「ユーリヤ
泣くことはないよ
本当の姿を
さらけだしてごらん」

ひゅ
ウッ
ウッ
ひゅ

「夫である私になら
見せてくれるだろうか？」
これでユーリヤには
夫に見えていたはずだ…
女生徒で実験してきたとはいえ
「本番」は緊張する



「あ……あ……」

ユーリアの目がうつろう

「アナタ……？」

「愛しているよユーリア」

ふと、あの夫婦が
言い合っている言葉が口に出た

虚ろだったユーリアの目が

焦点を取り戻す

「はい♥ アナタ♥

私も愛してます♥」



ちゅぷ♡ちゅぷっ♡

「はあっはあっ気持ちいいですか？」

「いぞ、ユーリヤ

どこでこんなこと憶えてきたんだ？」

「疲れた夫をHで

癒やすのは妻の権利♡デス♡

日本に来る前

たくさんAV見まシタ！」

催眠の影響だろうか

話し方が出会った頃に戻ったようだ

ちゅっ

ハッ♡ハッ♡

ちゅっ

もみゅ

たぶっ♡



「本当はずっとしゃぶりたかったんデスッ♡
チンポ♡♡」

「んふっ、すごいニオイ♡
みだらな妻で幻滅しましたか?」

「今までずっと隠してマシタッ!
…恥ずかしくて、言い出せませんデシタッ!」

「そんなことないぞ
スケベな妻で嬉しいよ」

「んふっ、幸せデス…」
（いつもは疲れて
フニャフニャなのに、
今日のアナタは
こんなに素敵デス♡）

「これならたっぷり
愛してあげられマス♡」

ちゅっ♡

へっ♡
へっ♡

へっ♡



おしゃぶり大好きっ♡

アッ♡

ン♡

ちゅぽっ♡ちゅぷ♡ちゅぽっ♡
なんて太くて逞しいのっ♡
こんなの絶対ッ♡
オマンコしたくなるッ♡
毎日おチンポして欲しいのっ♡

ちゅぷ♡

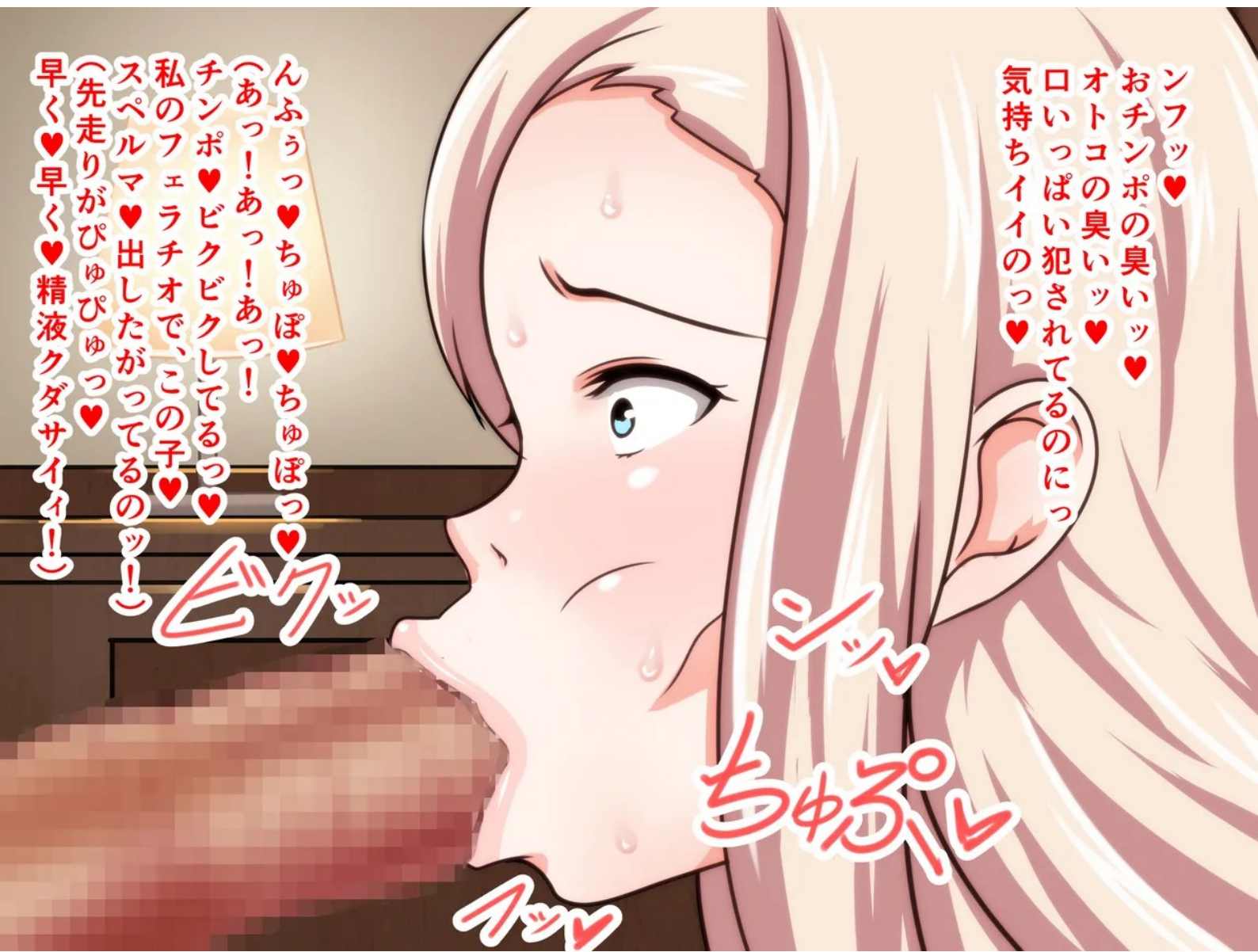
ンフツ♥
おチンポの臭いッ♥
オトコの臭いッ♥
口いっぱい犯されてるのになっ
気持ちイイのっ♥

ジッ♥
ちゅるっ♥

アッ♥

んふうっ♥ちゅぽ♥ちゅぽっ♥
(あっ! あっ! あっ!)
チンポ♥ビクビクしてるっ♥
私のフェラチオで、この子♥
スペルマ♥出したがってるのッ!
(先走りがびゅびゅっ♥
早く♥早く♥精液クダサイイ!)

ビクッ



「んっ♡んっ♡」
どんだん膨らんでるッ！
「うっんううッ！」
どびゅっ♡ビュルルッ
んふううっ♡出たッ♡
スペルマッ♡

「うっふうッ！フッ！」
尿道に残った分まで
彼女の喉奥にぶちまける
「んふううう♡♡」

ユーリヤは喉を鳴らしながら
精液を飲み込んだ
美味しそうに…



「チンポ入れるからなっ
セックスするぞっ!
ユーリヤッ!」

ぬぷぷっ

「あああんっ♡

きたあっ♡

チンポッ♡」

アッ♡

アッ♡

「あっ

これ♡

♡あッ♡

欲しかったのお♡」

ズッ♡

（ようやくお前を抱けた…！）

無数のヒダがねっとりと
熱く絡みついてきて
思わず腰が引けてしまう

「アツアンツアナタツ
いつもよりスゴイのお
遅しくて素敵っ♡
奥まで届いてるのオ♡」



(思った以上の名器だ
兄貴じゃ秒殺される
のも仕方ないな)

「あっ♡アッあ♡」

奥いいのっ♡
子宮口がチンポと
キス♡して
気持ちいいのお♡

こんなのっ初めてえ♡



彼女とベッドに横たわる

「はあ…はあ…

すごく…良かったの…

これからは毎日

セックスしましょうネ♪」

俺もそのつもりだ

はあ♡

はっ♡

ここで、彼女の催眠を解く



催眠をかけたことは憶えていない
彼女の中では自分から誘ったことになっている
間男に自分から積極的な
性行為をしたことだけを
憶えているはずだ
夫にもしないようなことを

「え……え……？」

「私なんてコトを……」

どうかしてる……

どうして……？どうして……？」

震えながらつぶやき続ける彼女

俺とセックスを楽しんだことが余程シヨツクだったようだ



「ユーリヤ、君は悪くないよ
兄貴が不甲斐ないせいだ」

「言っていたじゃないか
夫とのセックスは
物足りないって
兄貴が性欲薄すぎるんだよ」

「私は…私は…」



「そう君は悪くない
長年君を満足させられ
なかった兄貴が悪い」
「夫では本当には感じたことが
無いことに罪悪感が
あつたはずだ」

「君は夫は優しいと言うけれど、
君の悩みに気がつかない
そんな優しさにはどんな意味が？」

んぐっ

んぐっ
ウッ



「私、自分の欲求不満のはけ口に
あなたを利用したのね…」

「ごめんなさい…」

馬鹿みたい…私…」

「お願い、忘れて欲しいの…」

（私は…悪くない？
…すごく気持ちよかったの…
夫は教えてくれなかった…）

ユーリヤはあくまで自分が悪いと思い込んだようだ

んっ

んっ
ウッ

ユリーヤからのメールだ

内容は

「NO

Y5」

の2行のみ

1行目は夫の性交渉の有無と絶頂した回数

2行目は自慰の有無と絶頂した回数

特に意味は無いが、暗示をかけて毎日送信させている

最近、自慰では深く絶頂できないようにする暗示を追加した
そのせいか絶頂した回数が増えていた
長時間自慰に費やしているのかも知れない
たまたま夫とセックスしているが
絶頂した回数は常にゼロだった

もっとも兄貴の早漏具合では
ユーリヤを満足させることは出来ないだろう

今ユーリヤは男が欲しくて仕方が無いはずだ
そろそろ訪ねる頃合いだ

「ダメよ…」

もう二人きりで会ったらいけない…」

俺を迎えた彼女の呼吸は乱れ
赤面しており、言葉とは裏腹に
欲情しきつっているのを隠せずにした

「ダメ…」

本当にダメなの…」

彼女の抵抗は弱々しく
触れた肌は熱く火照っていた

「あ…」

「ああんっ♡はあっ♡あんっ♡
ダメッ♡ダメッ♡ああっ♡♡」

「本当にダメだと言うのなら
家にあげなければよかったはずだっ
こうなることを期待してたんだらうっ」

「そんなっ♡違うのっあああっ♡」
（私っそんなこと期待してたの？）
「前戯無しで濡れてるじゃないかっ」

「違うのおっ♡」

あんっ
あんっ



（ペニスのカタチはつきり感じちゃうっ
気持ちいいところ
ゴリゴリつて、擦ってくれるのっ
夫では感じたことのないっ
奥にまでっ届いちゃうのっ）

「あああ…ンッー♥
ああッ♥あッ♥」
自分が無意識に
腰を動かしていることに気がついた
夫以外のペニスを深く受け入れるように…

んんんん





（カラダが感じてるっっっ♡
夫よりも
求めちゃってるのっ♡
もっともっと気持ち良く
…なりたいのっ♡）

んんんん

んんんん

んんんん

んん

んん



「あ…」

ドクッビュルルッ♡
ドクン…ドクッ…
トク…ピュルッ…

んんん

アッ♡

アッ♡

アッ♡♡

アッ♡

「あはっ♥あははっ♥」
突然笑い出すユーリヤ
「ああ…セックスつて…」
「こんな気持ち
イイものなのね…」

「本当…
馬鹿みたいに
気持ちよかったの♥」

催眠とセックスが
彼女の「決定的な何か」
を変えてしまったようだ







「もしもし、あなた？
ひぐうっ♡」

「ん？どうしたの？大丈夫？」

「んふう♡」

大丈夫：んっ♡
気にしないでっ」

「今日帰り遅く
なりそうなんだ」

「そ、そうなのっ
あ：あなたッ
待ってるからっ」

ハァ♡
アッ♡

ガッ♡

ムッ♡

モッ♡

アッ♡
アッ♡
アッ♡

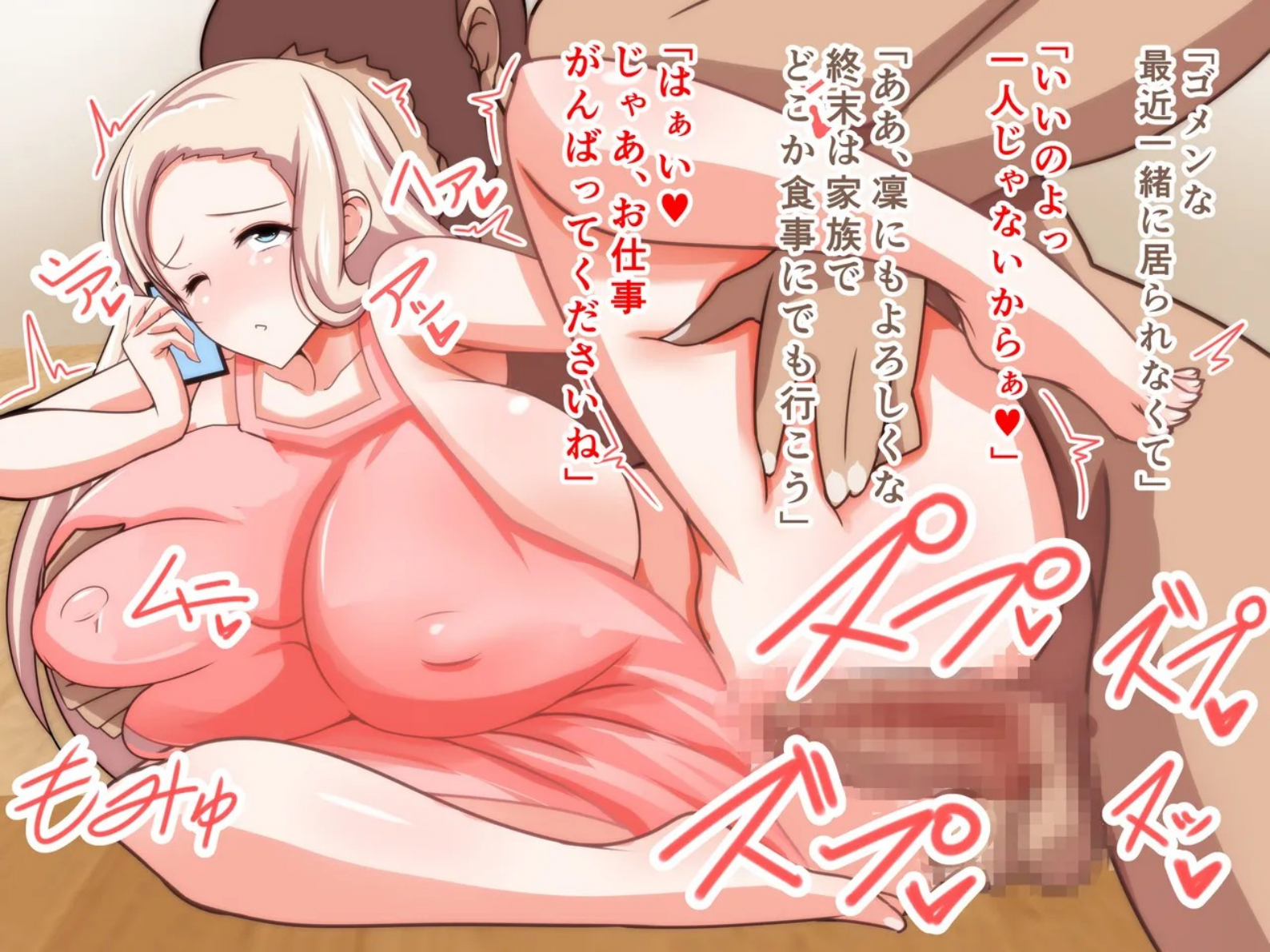
アッ♡
アッ♡

「ゴメンな
最近一緒に居られなくて」

「いいのよっ
一人じゃないからあ♥」

「ああ、凜にもよろしくな
終末は家族で
どこか食事にも行こう」

「はあい♥
じゃあ、お仕事
がんばってくださいね」



4
もみゅ

ア
ア
ア
ア

ドクンッビュルルッ
「アッアアアアアアッ!
アン…♡」

「ゴメンナサイ…
もう…あなたとのセックス無理…
こんなセックス知っちゃったらあ
無理なのお…」

「膣内ずつとビクンビクンしてたぞっ
間男とセックスしながら
旦那と電話して興奮してたのか？」

「ごめんなさいッ♡あなたっ♡
私浮気セックスで感じてるッ♡」
「あああ!!
またイカされちゃいましたッ♡」

わわっ♡

ハッ♡
アッ♡
ビクッ♡

アッ♡
ドクンッ
ビュルル♡

ビクッ♡

「ああんっ♡だめエっ♡
もうっ娘が帰ってきちゃうっ」

「その時は凜も一緒に
可愛がってやるっ」

「だめえっ
あの子彼氏いるのっ
あなたの息子とっ
祐二君とつきあってるのっ」



「そうか、じゃあユーリヤ
祐二の筆おろししてやるといい」

「祐二はいつもお前のカラダ見てるぞっ

お前をオカズにしてるんだっ」

「えっ？」（祐二君が私で
チンポ慰めてるのっ?）

（ああ…祐二君のチンポ
どんなカタチしてるのかしら♡）

「想像したなっ」



「あああっ！
ふうんっ♡あんっ♡」

「おおおんっ♡
アッ♡

「はいっ若い子のチンポ♡
想像してイキましたあ♡」



あん

あん

あん

アッ♡

あん

アッ♡

アッ♡

あん

「セックスの最中
他の男の事考えてイクなんて
とんでもない淫乱だなっ!」

「ああんっ♡
言わないでっ♡」

アへ♡

イタ♡

ほっ♡

へっ♡

アっ♡

ぴん

あん

ドクッ♡

ビュル♡



「さっきあんなにセックスしたのに
こんなに固いの♥」

たっぷりの乳肉で
俺のチンポを挟み込むユーリヤ
愉しげにチンポを乳肉でこねくり回す
「どンドン元気になってきたわ♥
おっぱいで挟むの、好きなのね？」

くすっ♥

むに♥

「このチンポ♥
本当にステキ♥」
「あんなに激しく
イッたのって初めて♥」
「ううん、私今まで
本当にイッたことなかったのお…」

「うっ、うっおおおッ！
出るッ！出るぞッ！」
ビュクッビュクッ！
ビュルル〜ッ！
「ああんっ
びゆる♡びゆるっ♡
射精ッ♡スゴイのっ♡♡」

「こんなに間近で
見た射精って初めて♡」

あーん♡

むん♡

ビュクッ♡



俺の射精を見て
少女のように
はしゃぐユーリヤ
ずっと恋い焦がれていた女

学生時代から
ずっと抱いてきた
彼女のイメージとは違う
淫靡な性欲剥き出しの牝だった
：この彼女を知っているのは
俺だけだ！



「ああンッ！」

ダメッ♡

これっダメなのお♡

「深くはいつちやつてるのッ！」

こんな愛され方もあるのねッ♡

アッ♡

アッ♡

「そらだユーリヤ
イケッ！」

ズッ♡

ズッ♡

ズッ♡

ズッ♡



ビュルルッ!
ドクンッ!
ドクッ!

ビクビクッ♡

「あんっ♡アッ♡ああアっ♡」

「夫以外に愛されちゃってる♡」

「愛し合ってる♡」

「ここは夫婦の寝室なの♡」

んっ♡
んっ♡

ビュルルッ♡
ドクンッ♡
ドクッ♡



んふうっ♡
ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡
名残惜しそうに
チンポを舐める彼女

「ユーリヤがこんなチンポ好きの
変態だなんて知らなかったよ」

「ごめんなさい♡」
「本当は♡今日会った時から
勃起チンポ気になってましたァ！」
「だって、だって、
ズボンの上からでもわかるくらい
勃起してるんですもの♡」



「すっかり素直になってくれたな
ユーリヤが浮気好きの
変態で嬉しいよッ」

「ああんっ♡言わないでエ♡」

「だって、だって
あの人ったらッ
ベッドで全然構って
くれないんですものッ」

長年憧れていた
一度は諦めた女
そんな彼女と
セックスの快楽を
共有することができた

ペニスを頬張り
しゃぶる彼女を
愛おしく感じた



くんつくうん...

「ああ...

このニオイ

カラダがうずくのっ」

「セックスしたくなる♡

オスのニオイ♡」

♡♡♡

♡♡♡

ちゅっ

「ねえ♡もつと

セックスちょうだい♡♡

セックス大好きなお♡」

この様子ではしばらくは関係を

秘密にするために

また催眠が必要になるな

もみゅ

たろ♡

「ラン♪フフン♪」
「最近ご機嫌だね」

「こここのところ

体の調子すごく良いの♪」

「それは良いことだね
スポーツでも始めたのかい？」

「う〜ん、そういう

ワケじゃないんだけど…
どうしてかしら？」

（もしかすると…
あの夢のせいかしら？）

「おっと時間だ、もう出るよ」

「は〜い

アナタ、

いってらっしゃ〜」

淫靡な夢…
欲求不満
なのかしら

あら着信

こんな曲
入れてたかしら？

ピルルランラ

あ…

夢と言うには生々しい
セックスの記憶

すごくキモチイイ…

あ…ああ…

どうして
忘れてたのかしら…

あの人…来る

お迎えしなきゃ

「本当の私」に
戻らなきや…

言いつけ通り
出迎えてくれたな

ユーリヤ

はいっ
おまんこ濡らして
お待ちしてましたあ
♥

今日も
たくさん
おちんぽ♥
ちようだい♥

動物みたいな
セックス♥
私と交尾して
欲しいの♥

くちゅ

ちゅん

ちゅん
くちゅ

なんか最近疲れてるのかな

夕ご飯食べた後、すぐ寝ちゃうし

今も朝ご飯食べたばかりで…

少し横になってから出かけよ…

「なに…これ…」

「さて、目が覚めたか」

「カラダは動かないだろうが
残念な知らせがある」



「凜、祐二に新しい

彼女ができたみたいだぞ」

「セックスできれば

誰でもいいみたいだな」

「…ありえない」

「私達は昔からずっと…」

最近ようやく

お互い素直になれて…

通じ合えたんだから」

「それならこれを見るといい」



画面には重なり合う二人の姿が映っていた二人は何か耐えるように激しく震えていた…

「おばさんっ…
うっ…あああ…
はっはあっ…
おばさん、ごめん
中に出ちゃった…」

「ふふっ、最初からそうするつもりだったんでしょ？」
「絶対に中を出すって腰使いだっただもの♡」

ビュッ
ドッ

プルッ

プルッ

アッ

アッ

アッ

お母さんと祐二
何を言っているんだろう

画面で起きていることを
私は理解できないでいた



「娘の彼氏の童貞
貫っちゃった♥」
「娘には内緒よ?」

「はいっ
誰にも言いませんっ!
墓までもってきますっ!
だからっ!」

「ああんっ!
チンポまた固くなってる
セックスしたがつてるのお!」



「俺っ、おばさんとなら
何度だってヤレますッ！」

「なんで夫以外の
チンポってこんな逞しいのおっ」

「うおおっ」

「素敵ッ！犯してっ！」

画面の向こうで
狂ったように腰を振る祐二

「息子みたくに
思ってたのにいつ！」

子種注がれて
感じちやってるのおっ！」



「ああんっ♡
イクツイクウツ！」

「あああ…♡

二回目なのに
すごいのお…♡っ♡

「おじさんより
うまくできてるかな？」

「うん、比べものにならないわ
あのひと優しいけど

オトコとしては物足りない」

「チンポはね祐二君
のがキモチイイの…♡」

ドッポ♡

ムギユ♡

ムギユ♡

アッ♡

アッ♡

「おばさんっ好きだっ！
俺の彼女になってくれっ！」

「ああんっ♡ダメダメッ
娘を悲しませちゃうっ」
「私母親だからっ！
チンポとマンコだけの
関係がいいのおっ♡」

「…何言ってるの？
理解できない…
理解しちゃう…
いけない…」



「コレ、なにかの間違いだから…」
「気の迷いだから…」
「しょうがない…よ」

「このビデオは俺の家で真っ最中の
生セックスライブだが
次のは少し前に撮影したものだ」

別の映像が映し出される



「あああつおばさんっ
生フェラ気持ちいいっ」

「凜とはもうセックスしたの？」

「キスだけですっ
あと、たまにカラダ
触らせてくれるだけでっ」

「それじゃ
ガマンできないわよねエ」

「娘の部屋に帰る前に
タップリ射精させてあげる♥」



「おっおおおお！
ああ〜」

（これうちのトイレだ…
以前私の部屋に呼んだときに…
こんなこと…してたんだ）

「ご覧の通りお前に内緒で
前からこういう事をしていたんだ
突然の気の迷いで
セックスしてるわけじゃない」



祐三は一応あれでも息子には違いない良い思いをさせてやりたいという親心はある

筆おろし体験がユーリヤなら一生の思い出になるだろうユーリヤを抱かせてやっているのはもう彼女が妊娠しているからだ

そして：ユーリヤが他の男に穢される姿を見て激しい嫉妬と：興奮が突き上げてくるのを感じていた

その劣情をこの若い娘に注ぎ込んでやるのだ
母娘共々、孕ませて：やる！！

むん、むん、

（カラダ…思うように動かない…
頭もぼんやりして…）

「やめて…ねえお願い…
私、初めてなの」

服を脱がすと母親譲りの
白い肌が露わになる
「凜、優しくはしないぞ
セックスの味を
教え込んでやるからな」

「あああッ！何コレえっ！」
（ゴリゴリッって乱暴なのにッ）
「アッアンっ」
（私初めてなのにっ
おっきいのが入ってきてるだけでっ
気持ちイイッ）

やはり生娘はシマリが違うなッ

こんなモノみたいに使われて…
優しさの欠片も無い
セックスなのにっ
私感じてるッ

「ああーッ！」

「お願いッ止めてッ！
おかしいのっコレッ！
おかしくなっちゃうのっ！」

「もう膣で感じてるのかっ？」
「さすがユーリヤの娘だッ！
根っからの淫乱だなッ！」

うぁっ♡

あっ

「違うっ
わたしそんなんじゃない…」

「好きでも無い男に
惚れた男の父親に
犯されてここまでよがるかつ！」

「アアアッ！
違うのおっ
んっんっんっ」

「フッフッ！
イクぞっ！
膣に出すからなっ」

「ダメダメッ！
お願いっ中ダメッ！
外につ！」

「ダメッ」

「くっ」



ドビュルッ

「ウッ！オオオ…」

「アッアアアッー！
ナニッコレッ…
あっアア…あっああ…」

（熱いのがっ流れ込んでっ
嘘ッウソッ私のカラダがッ
あんっ私の子宮が
悦んじゃってるっ）

「これが私の初めての…
セックス…
祐二…バカ…」

アッ

アッ

二時間後

「もうっわかかったからあ

やめてえ…」

「セックス♡いやあ…♡

あんっ♡アッ♡」

「ユーリヤ達は

まだヤッてるな

俺たちも愉しもうな♪」

(スゴイッ♡

深くまで入っちやっってるっ♡

奥ごんごんっ♡

てされてるのおっ♡)

アッ♡

アッ♡

アッ♡

アッ♡

アッ♡

アッ♡

アッ♡

アッ♡

アッ♡



「分かってないだらうがっ!」

パンパンパンツ!

「アッアッアッアッ!」

「イグツッ! イってますっ!」

「おじさんのチンポでツッ♥」

「イッてますからあつ♥」

「初物はいいもんだっ!」

「どうしてっ!?!」

「体が熱くてツッ!」

「イクの止まらないッ!」



(レイプなのにつ
愛情なんてないのにつ)

(なのにつ
なんでこんなにな)

「キモチいいのお♡」

「んああッまたイクッ♡
イクイクッ♡
あああああッ♡」

ビク♡

プルい

プル♡

グッ♡

グッ♡

ドム♡

グッ♡

ドム♡



「良かったぞ凜
どうだオンナになった感想は？」

（私…イッたんだ…
おじさんの精液熱くて…
頭真っ白になって…）

（自分のカラダが
こんなになるなんて…
知らなかった…）

（知りたくなかったのに…）

くろっ



「凜、これでお前は俺の女だ」

ちゅぽ

「はい…私は…
おじさんのオンナ…」

ん

「もう…祐二の…
カノジョじゃないんだ…」

グ



翌日、私は学校を休んで
おじさんが来るのを待った

（おじさんと向かい合っただけで
カラダはもう火照って…
私セックス期待してる…）

「教えたとおり
ちゃんとおねだりするんだ」

「はい…お…
おチンポ…ください
おじさんのおチンポで
犯してくださいっ」



（おじさんとのキス…

祐二とは違う…

ねっとり舌を絡ませたり

口の中をあちこち

探るようになってくる…）

（知らなかったことを
教えてくれる…

おじさんが私を
オトナの女に…してくれる…）

（胸を強く揉む

おじさんの手が熱くて…

気持ちイイ…♡）

ちゅっ

んっ

むにっ

「おおお…」

前戯もナシで
こんな濡らしやがって」

ああんっ♡

違うのおっ♡

「セックス

覚えたてのくせに

発情期の雌犬

並みじゃねえかっ」

たふ♡

たふ♡

たふ♡

たふ♡



「ああーッ♡
スゴイっコレッ
イクッ♡イクッ♡
イクッ♡」

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

イクッ♡

「この歳でこんな
オッパイ揺らすか普通ッ！」
「母娘揃って下品な
乳しやがって！」

イクッ♡

イクッ♡

「何も考えるなっ
全部俺に任せて
マンコにだけ集中してろっ」

「はひいっ♡
おまかせっ♡セックス♡
おマンコ♡おあずけしますっ♡」

「はっはっ♡
あっおっ♡」

「おまんこズポズポ
犯されて悦んじやってるうう♡」





「んああああっ♡
おまんこ♡
キモチイイのおおっ♡」

ドクンッ
ドプッ
ビュルルッ
ビュルルッ

「あああ…♡
中にでてるよお…♡」

(生セックス…コレ
…赤ちゃんできちやうヤツだ…)

とてぱん
どろ
どろ

「お互いカラダが大分馴染んだなもう完全に俺のオンナだ」

「そうなのっ？
私のカラダおじさんに
変えられちゃってるのっ？」

ドキ
ドキ
ドキ

ドク
ドク

ドク
ドク



ドクンッビュルルッ

「んあああつ

ああーッ

アア…♡」

あゝ♡♡♡
あゝ♡♡♡
あゝ♡♡♡

ビクッ
ビクッ
ビクッ

ぐんぐん
ぐんぐん
ぐんぐん

（こんな気持ちイイのっ♡
セックス毎日して…
満たされちゃってる…♡
私もう、おじさんから
離れられない…♡）



ちろちろっ♡ぺろっ♡
ちゅっ♡れろおっ♡

「おじさん気持ちいい?」

ちゅっ♡ちゅぱっ♡
ちゅっ♡
「んふう♡お掃除フェラ
いかがですか?」



ん♡

ちゅっ♡

ちゅ

ん♡

ちゅっ♡

ちゅぷっ♡
ジュポ♡ジュプ♡
ちゅるるっ♡♡

「あっお母さん
ずるいっ
私もお…♡」

「いい凩？
フェアチオはね
こうやって唇で…」
んちゅ♡ちゅぷ♡
ちゅぽ♡ちゅぽ♡



しゅぷっ♡
しゅぷっ♡

んっ♡
んっ♡

「はい、凜の番よ♡」

ぬちゅ♡ぬちゅ♡
ちゅぷ♡ちゅぷ♡
ぬぷ♡ぬぷ♡

「んふう♡
おじさんのちんぽ♡
大好きい♡
んんん♡」

「ふふっ良い調子♡
凜もすっかり
このチンポに夢中ね♪」

ハッ♡ハッ♡
ん♡ん♡
トゴトゴ♡
トゴトゴ♡

「精液濃くて
ぷるっぷるなのお……♡
ひゅごいよお……♡
んっこくっ」

「お掃除でこんなに沢山
精子だしちやうなんて
ふふっ凜のお口
気持ちよかつたのね♡」

アッ♡

ちゅっ♡

たっぷ♡

ぷん♡

兄貴の会社のオーナーと共謀した結果
兄貴は長期の海外出張に出かけることになった

「兄貴、家族のことは任せてくれ」

「お前にも色々面倒かけて済まないな
家族のことを頼む」

これでいつでも二人を抱くことが出来る
兄貴に今の二人の姿を生で見せてやれないのは残念だ

「ずっと欲しくて
たまらなかつたのお♡
安定期に入るまで
おあずけだったからあ♡」

「俺もずっと
ガマンしてたからなっ
たっぷり可愛がつてやるっ」



あ
ん
ん
ん
ん

ん

「んあああつ♡
嬉しいっ♡」

「おっ♡おっ♡
おおおっ♡」

「イクツ♡
いくうううっ♡」

「赤ちゃんにアクメツ♡
伝わっちゃってるうううっ♡」



「ねえ母乳でるようになったよ♡」

「おじさまが私を
こんなカラダに
したんだからね♡」

んふ♡ あ♡

「ミルク絞られて
Hな気分♡
なっちゃうの♡」

「んっ♡
ふうっ♡」

ぽゅ♡

ぽゅ♡

ぽゅ♡

ぽゅ♡

「おじさま♡」

アソコも可愛がって♡
ずっとおあずけで
切ないのっ♡」



「はあっはあっ
コレッ
チンポ♥欲しくて
たまらなかつたのっ♥」

アッ

ハッ

「んああっ♥
んおっ♥」

「ボテ腹姿でスケベな
腰使いしやがって」

「だつてえ♥
キモチいいんだもんっ♥」

たん
たん
たん

たん
たん

凜が「おじさま」と呼び始めた頃
ユーリヤが「ご主人さま」と呼ぶようになった
娘に対してどこか一歩引いているのかもしれない

「おじさま♡
気持ち良いですか？」

「ご主人さま♡
いつでも射精してくださいね♡」

おぎゅ♡

おぎゅ♡

もちろん、二人とも
可愛がるつもりだ

「ふふっ♡
本当におっぱい好きなんです
もうビクビク♡
限界みたいです♡」

くっ♡

アッ♡

ビク♡ ビク♡



母娘に
奉仕されるのは

最高だっ

「あん♡」
「ぎゃっ♡」

ご主人さま♡
嬉しい射精♡
ありがとうございます♡
ニオイだけでまた妊娠しちゃいそう♡

ドク

ドク

「もうっお母さん…」

そんな気持ちよさそうにしてたら…
私ガマンできないよ…」

「んっ♥あっ♥ああ♥
子宮口こんこんって♥
気持ちイイのっ♥」

「あっ♥んっ♥
あっ♥あっ♥」

「んはあ♥
娘に見られながらイクッ♥」

ト
ト

ト
ト

「はっ♡はっ♡

おじさまあ♡

子宮突き上げてっ♡

あああんっ♡」

「赤ちゃんの部屋♡

トントんって♡」

「ふふっ

大きなお腹のHな新婦ママ♪

可愛いわ♡」

トントん♡

トントん♡



「あああっ♡イクウウ♡」

「妊娠してるのにいつ♡
お腹に赤ちゃんいるのになっ♡」

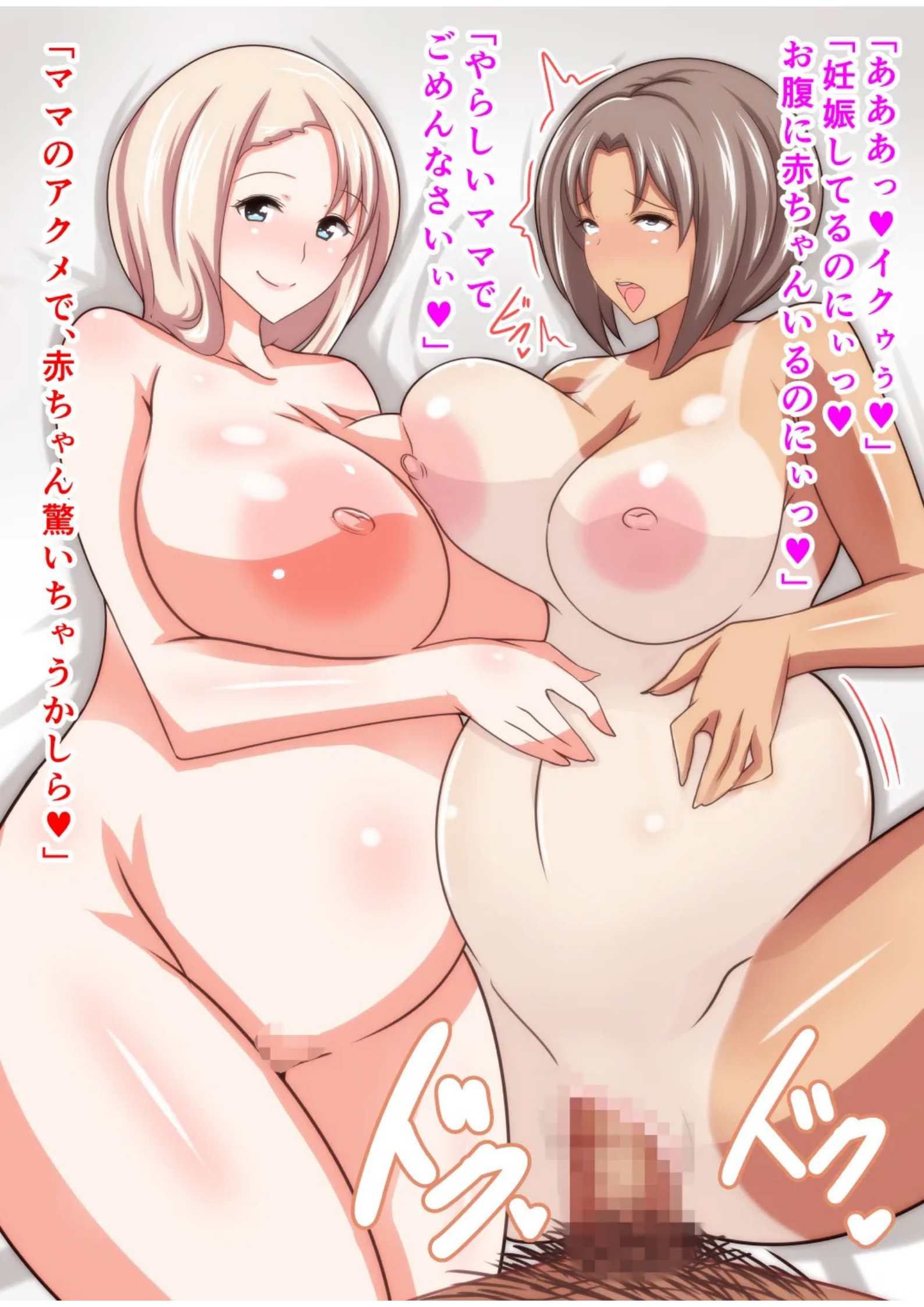
「やらしろママで
じめんなおらっ♡」


「やらしろママで
じめんなおらっ♡」

「ママのアクメで、赤ちゃん驚いちゃうかしら♡」

ドン♡

ドン♡





仕事に忙殺されていたのと
時差もあるので、このところ電話での連絡も滞っていた
しかし、帰れば新設部署を任せてもらえる
妻も喜んでくれるだろう

家族に会えない寂しさを
仕事に打ち込むことで紛らわせていた
そんな折りに、弟が家族のDVDを送ってくれた

ん？これは寝室？

「ごめんなさいアナタ
今、私、ご主人さまに
可愛がられてますっ♡」

「凜も一緒なのよっ
私達、幸せなのっ♡」

…なんだ…これ

「兄弟なのになんかここまで

オスとしての性能が違うなんて思わなかった」

「夫はセックスで選べば良かったんだわ

アナタを選んだのは、間違いだったのっ！」

んふ
ちゅぽ

れろ
れろ

はっ

「だからこれから……

アナタの弟の赤ちゃん産みます

凜も一緒に妊娠したのっ」

「パパ心配しないで、私ちゃんと産めるから」
「おじいちゃんになるんだよ
あれ、パパの弟の子供だから
甥か、姪になるのかな？」

どろろ

んっ

うっ

「私は…娘の幸せのために
愛人でガマンするわっ
でも赤ちゃんもう一人欲しいかしら♥」

「遠い異国で頑張ってるアナタ
もう私は慰めてあげられないけど」

ちゅぽ
♡

んっ
♡

「このビデオで
ちゅちゅいおチンポ
シコシコしてね♪
きつと元気出るわ♡」

んっ
♡



「愛して…たわ
さようなら」































たろん♡



ア..

ハア..

ハア..

毛み
中

毛み
中





ひゅっ

ウッ

ウッ

ひゅっ





















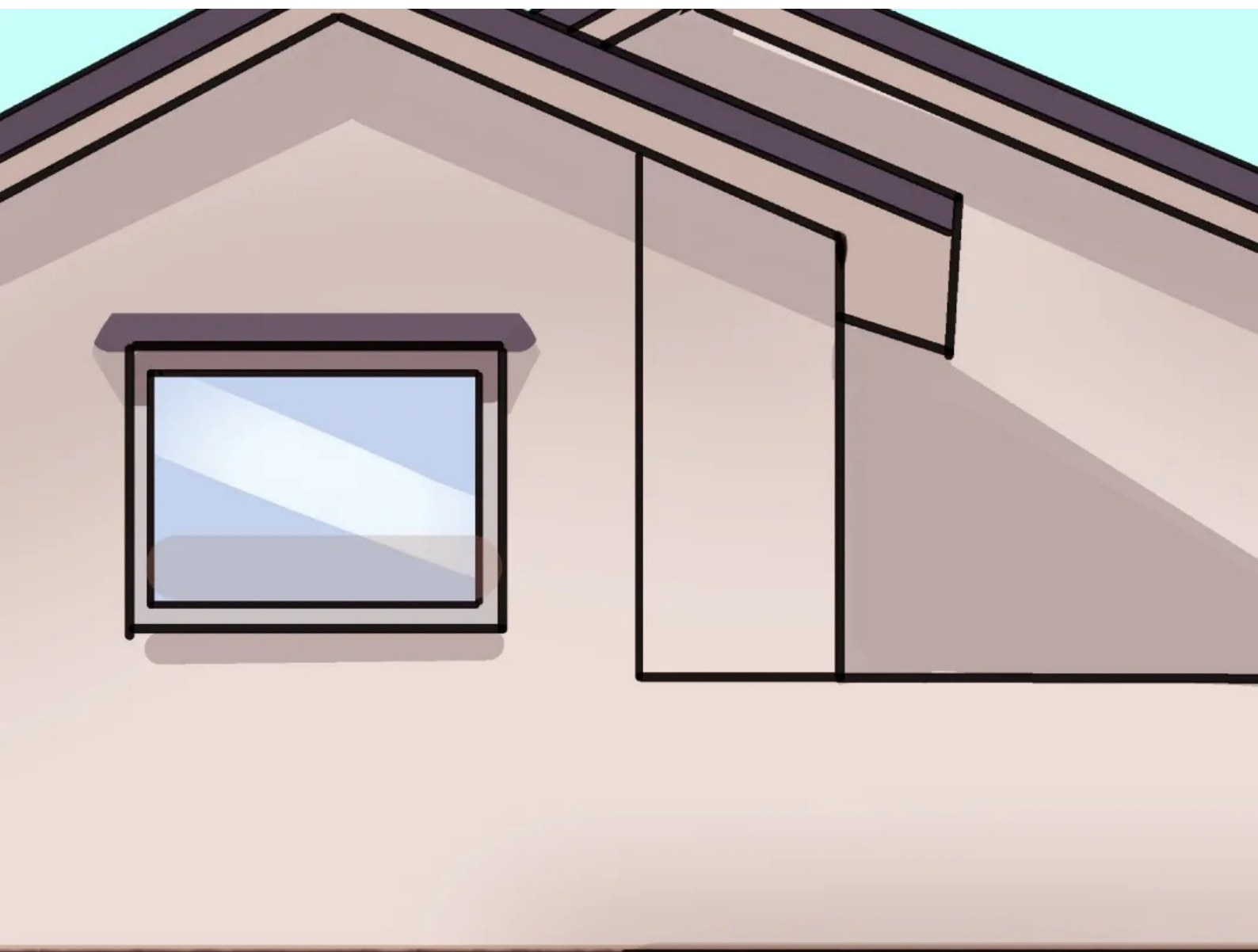






































アッ♡

アッ♡♡

アッ♡♡♡

アッ♡♡♡

アッ♡♡

アッ♡♡♡♡

アッ♡♡♡♡

アッ♡♡♡♡♡

アッ♡♡♡♡♡♡





















